

自己呈示に対する受け手の反応が呈示者の 自己評価に及ぼす影響

原 郁水・深田博己・樋口匡貴・高本雪子

Influence of the receiver's feedbacks regarding the sender's self-presentation on the sender's self-evaluation

Ikumi Hara, Hiromi Fukada, Masataka Higuchi, and Yukiko Takamoto

本研究では、呈示意図と呈示形態が異なる自己呈示である自己卑下呈示と呈示意図と呈示形態が同一の自己呈示である自己高揚呈示に対する受け手の反応が、呈示者の自己評価に及ぼす影響を検討することを目的とし、場面想定法を用いた質問紙実験を行った。実験計画は能力呈示場面と性格呈示場面の2つの場面において、それぞれ2（自己呈示形態：自己卑下呈示・自己高揚呈示）×2（受け手からの評価的反応：高評価反応・低評価反応）の2要因実験参加者間計画を採用した。実験参加者はシナリオを読んだ後、従属変数である自己評価の変化に回答した。その結果、受け手からの評価的反応の主効果が有意であり、呈示形態にかかわらず、高評価反応を得たときの方が低評価反応を得たときよりも実験参加者の自己評価は高くなっていた。呈示意図と受け手の反応の一致、不一致が呈示者の自己評価に影響を与えることがわかった。

キーワード：自己呈示、自己卑下呈示、呈示意図、受け手の反応、呈示者の自己評価

問 題

1. 自己呈示

1-1. 自己呈示の定義と特徴

人は、自分のことを他者に伝えるとき、必ず素のままの情報を伝えるというわけではなく、一般的に自分のよい情報を伝えることが多い。人は自分のよい情報を伝え、悪い情報を隠すことで、他者が抱く自分に関する印象を調整しようとする。このような、他者から見られる自分の印象に影響を与えようとする行動を自己呈示と呼ぶ。

自己呈示の定義には様々な意見があり、研究者の間で完全に合意が出来ているわけではない（安藤，1994）。例えば、Schlenker（1980）は自己呈示を、現実のあるいは想像された社会的相互作用に反映されるイメージを統制しようとする意識的・無意識的な試み、と定義している。また、Tedeschi & Norman（1985）は自己呈示を、社会的な相互作用の仮定を統制するために使われる影響戦略であ

り、行為者が特定のアイデンティティを持つものとして他者に知覚させるような企み、と述べている。このように、定義の不一致はあるが、自己呈示は自分の望む印象を相手に形成させようとする意図的な行動であるといえる。自己呈示は呈示者が自らのために行う行動であり、そのため、自己呈示は呈示者に何らかの影響を及ぼす行動であると考えられる。

1-2. 自己呈示の機能

Leary&Kowalski (1990) は「報酬の獲得と損失の回避」、「自尊心の維持・高揚」、「望んだアイデンティティの確立」という自己呈示の呈示者への3つの機能を挙げている。

まず、自己呈示を行い、望む印象を相手に伝えることは、望む結果を得やすくし、望まない結果を得にくくする。その結果として自己呈示を行うことが対人的・物質的な報酬を獲得しやすく、損失を回避しやすくする。また、自己呈示によって他者の賞賛を引き出したり非難を避けたりすることが可能である。他者から賞賛されることは多くの場合自己評価や自尊心の高揚につながり、逆に、他者から非難されれば一時的に自尊心は低下する。そのため、自己呈示によって、賞賛を引き出したり非難を避けたりすることが自尊心の維持・高揚につながる。さらに、自分の公的な印象と自己概念を一致させるような自己呈示を行うことがアイデンティティを確立する重要な手段となる。

このように自己呈示は呈示者自身にも様々な機能を与えることが示されている。これらの機能は、自己呈示を長期的に行うことが呈示者自身にもたらされる機能であると考えられる。長期的な自己呈示の機能は、短期的な自己呈示の影響の積み重ねである。よって、より詳細に自己呈示の機能を検討するために、自己呈示が呈示者自身に及ぼす短期的影響を検討することが必要になるだろう。

以下、自己呈示が呈示者に及ぼす影響について検討した論文を紹介する。

2. 自己呈示が呈示者に及ぼす影響

Gergen (1965) は古典的条件づけとオペラント条件づけの見地より、社会的な強化によって人の自己の見方が変化すると考えた。そして、自己に関する表出である自己呈示に対する受け手からの反応が、その表出の送り手の自己評価に与える影響を検討した。その結果、自己呈示に対する受け手からのポジティブな反応が送り手の自己評価にポジティブな影響を与えたことを明らかにした。

以来、自己呈示が呈示者の自己評価に与える影響が検討されている。自己呈示が呈示者に与える影響に関する過程は、①自己呈示が受け手からの反応を通して呈示者に与える影響に関する過程

(Dymkowski & Cisek, 1998; Gergen, 1965; Upshaw & Yates, 1968) と、②自己呈示を行った後、呈示場面にいない受け手の反応を呈示者が予測することが呈示者に与える影響に関する過程 (沼崎・市川, 1997; Schlenker, Dlugolecki, & Doherty, 1994)、③自己呈示を行うこと自体が呈示者に与える影響に関する過程 (e.g., Jones, Rhodewalt, Berglas, & Skelton, 1981; Rhodewalt, 1998; Rhodewalt & Agustsdottir, 1986) の3つに分類することが出来る (沼崎・市川, 1997)。Figure 1は沼崎・市川 (1997) を参考に、自己呈示が呈示者自身に及ぼす影響を受け手の存在の視点から分類したものである。本研究では①を直接的対人過程、②を間接的対人過程、③を個人内過程と名付け、呼ぶこととする。短期的な自己呈示が呈示者自身に与える影響は以上のように3つの過程に分けて捉えることが出来る。Gergen (1965) 以来、最も研究が行われ積み重ねられてきているのが③の個人内過程である。

Jones et al. (1981) は、自己呈示の後に呈示者の自己評価が変化していることが Gergen (1965) に

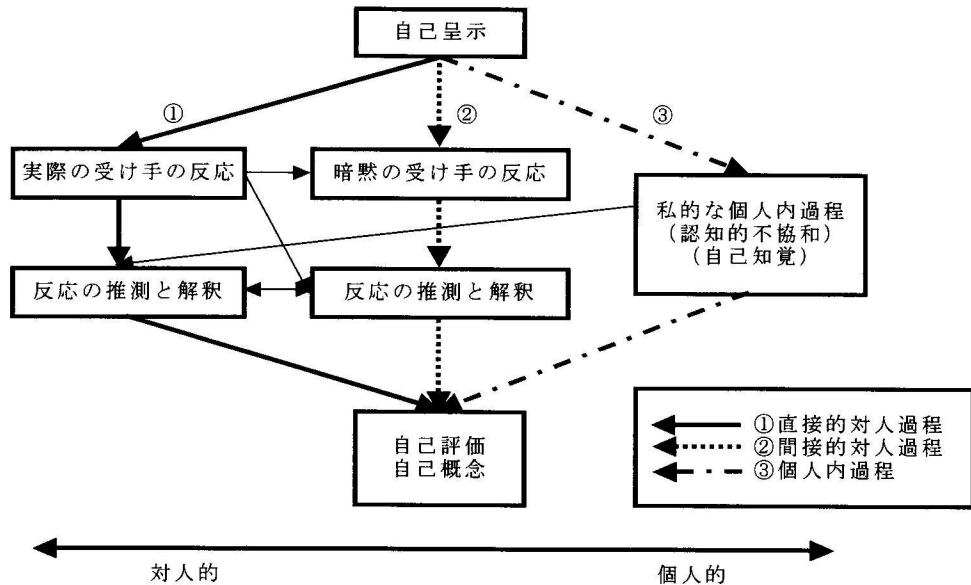


Figure 1 自己呈示が呈示者に及ぼす影響の3過程モデル

よって示されているが、そのとき呈示者に何が起きているのかわからないこと、これまで自己呈示が呈示者に与える影響に関してはほとんど検討が行われていないことを指摘した。そして自己呈示が呈示者に与える影響を詳細に検討するために、受け手からの反応無しで自己呈示を行うこと自体が呈示者に与える影響を検討した。それ以降自己呈示が呈示者に与える影響の研究の文脈では主に③の個人内過程に焦点が当てられて研究が行われている。しかし、実験室でなく現実場面を考えた際、自己呈示は他者へのコミュニケーション行動であり、実際に受け手が存在することが多く、受け手から何らかの反応を受け取る場合が多い（足立，1998）と考えられる。また、②の間接的対人過程に関しても、現実場面を考えた際、潜在的他者の反応を想像することからよりも実際に受け手の返した反応から呈示者は明白な影響を受けるだろう。このように自己呈示には受け手の存在が不可欠であり、また受け手からの反応までを含めて捉える必要があるだろうと考えられる。

したがって本研究では、個人内過程や間接的対人過程ではなく、直接的対人過程こそ、自己呈示が呈示者自身に及ぼす影響過程の基本的な過程であると考え、焦点を当てる。以下、自己呈示に対する他者の反応が呈示者自身に与える影響に関して行われた先行研究を紹介する。

3. 直接的対人過程の先行研究

3-1. 実験的研究

Gergen (1965) は自己高揚的呈示に対する肯定的な反応が、呈示内容に対応する自己評価をポジティブに変化させたことを明らかにした。Gergen (1965) を受けて、Upshaw & Yates (1968) は独立変数として呈示形態を操作し、自己高揚的呈示と自己卑下的呈示に対する反応が呈示者に与える影響を検討した。その結果、呈示形態と反応が一致したときのほうが一致しないときよりも、自尊心がポジティブに変化することを示した。また、Dymkowski & Cisek (1998) は、自らを独立的に見

せる自己呈示に対する受け手の反応の影響を検討した。その結果、独立性を高く評価する反応が返ったときのほうが、独立性を低く評価する反応が返ったときよりも、後の自己評価において自らの独立性を高いと評価することを明らかにした。さらに、全体的な自己評価や自尊感情よりも、呈示内容に対応する自己評価のほうが、自己呈示から受ける影響が大きいことを示した。以上より、これらの先行研究から呈示形態と反応が一致したときに、呈示内容に対応する自己評価や全体的な自尊心がポジティブに変化すると考えられる。

3-2. 調査的研究

吉田・浦・黒川（2004）によると、自己卑下呈示に対する否定反応（呈示意図との一致反応、すなわち高評価反応）が呈示者の自己評価をポジティブに変化させること、自己卑下呈示に対する共感反応（低評価とも高評価ともいえない反応）は呈示者の自己評価に影響を与えないことが調査によって明らかになっている。この研究結果から、呈示形態と反応の一致ではなく、むしろ呈示意図と反応の一致が重要になると解釈することができる。

4. 先行研究の問題点と本研究の目的

4-1. 先行研究の問題点

以上のように先行研究を研究方法によって分類し、まとめたが、問題点として、自己卑下呈示に注目した場合、研究方法によって結果に矛盾があることが指摘できる。それは、実験的研究（Upshaw & Yates, 1968）では、呈示形態（自己卑下呈示）を肯定する反応、つまり形態と一致した反応（「悪い」という低評価反応）が呈示者の自己評価にポジティブな影響を与えているが、調査的研究（吉田他, 2004）では、呈示形態（自己卑下呈示）を否定する反応、つまり形態との不一致反応（高評価反応）が呈示者の自己評価にポジティブな影響を与えているという点である。

自己呈示の分類では、その呈示形態によって自己高揚呈示と自己卑下呈示に分類することができる。吉田・浦（2003）を参考に、本研究では、自己高揚呈示を「他者に対して選択的に自己の肯定的な側面を呈示すること、自己の否定的な側面を積極的に呈示することを避けること」、自己卑下呈示を「他者に対して選択的に自己の否定的な側面を呈示すること、自己の肯定的な側面を積極的に呈示することをさけること」と定義する。自己卑下呈示は否定的な面を呈示するが、その意図は呈示内容での高評価を得ることや呈示内容以外で好ましい印象を抱かれることにあり（吉田他, 2004）、その意図と形態が異なることが特徴的な自己呈示である。呈示意図と呈示形態が異なる自己卑下呈示を用いることで、呈示意図と呈示形態が呈示者に及ぼす影響を明らかにすることができるため、自己卑下呈示に注目することは重要であると考えられる。

調査研究と実験研究における結果の違いは、自己卑下的な自己呈示を実験的に扱った Upshaw & Yates（1968）の研究において、呈示形態と呈示意図が区別されていないことが原因であると考えられる。Upshaw & Yates（1968）の研究においては、好ましく（favorable）見せる意図によって自己高揚呈示が、好ましくなく（unfavorable）見せる意図によって自己卑下呈示が行われており、呈示意図と呈示形態が区別されていない。そして不適切な呈示形態（呈示意図の混入した呈示形態）と一致した反応を得た場合のほうが不一致反応を得た場合よりも呈示者の後の自己評価は高くなったという結果が示されている。Upshaw & Yates（1968）の研究を呈示形態の面から見ると、自己呈示

形態が操作され、実験参加者は自己高揚呈示・自己卑下呈示を行っているが、意図の面から見ると、実験参加者は頼まれた演技を行っているにすぎない。現実場面を考えると、自らを悪く見せる自己卑下呈示であっても、その意図は自らをよく見せることであると考えられる。吉田他（2004）の調査では、自己卑下呈示の動機が、「好感度を上げること」や「否定反応を得ること」であることが分かっており自己卑下呈示の動機に「悪く見せるため」という動機は存在しなかった。しかし、Upshaw & Yates (1968) の実験では呈示意図が考慮されておらず、呈示形態と呈示意図が同一であったため、呈示意図を考慮した調査的研究と矛盾が生じたと考えられる。自己高揚呈示 (Gergen, 1965) や独立性の自己呈示 (Dymkowski & Cisek, 1998) では呈示形態と呈示意図は同一であるため区別する必要はないが、呈示形態と呈示意図が異なる自己卑下呈示では呈示形態と呈示意図を明確に区別する必要性がある。

以上のような理由から Upshaw & Yates (1968) の研究を除外すると、呈示意図と呈示形態が異なる自己卑下呈示が呈示者に与える影響を検討した研究は吉田他（2004）の自己卑下呈示に関する調査研究のみとなる。吉田他（2004）によると、自己卑下呈示に対する呈示意図と一致する受け手の反応（自己卑下呈示を否定する反応、すなわち高評価反応）が呈示者の自己評価を高めることが明らかになっている。しかし、調査研究のため因果関係が証明されたとはいえない。また、自己卑下呈示に対する否定反応（高評価反応）と共感反応（高評価とも低評価とも言えない反応）が、呈示者に及ぼす影響が明らかになっているが、共感反応は「卑下した自分の気持ちに共感を示すような返答」といった内容であり、吉田他（2004）の調査した呈示意図と全く一致しない反応であるとはいえない。そのため厳密な不一致反応が呈示者に及ぼす影響についてはわかっていない。さらに、呈示意図と呈示形態が一致している自己高揚呈示に関する影響は明らかになっていないという問題点がある。

4-2. 本研究の目的

本研究ではこれらの問題点を改良し、自己呈示に対する受け手の反応が呈示者に及ぼす影響を検討する。自己呈示者となる実験参加者の自己呈示意図を直接操作するような実験室実験は非常に実施が困難である。そのため、現在まで、自己呈示意図を考慮した上で、受け手の反応の要因が呈示者に与える影響を実験的に検討した研究は存在しない。しかし、場面想定法を利用したシナリオ実験を導入することによって、上記の問題点が解決できる。すなわち、自己呈示の動機を「自分を肯定的・好ましく見せること、すなわち高評価を得ること」と仮定し、より現実場面に即した場면을シナリオ法で設定することで、自己呈示が受け手の反応を通して呈示者に与える影響を実験的に検討することが可能になる。また、明らかに意図と一致する反応を一致反応、一致しない反応を不一致反応として用いることで、一致反応と不一致反応が呈示者に与える影響を比較することが可能になる。さらに呈示意図と呈示形態が一致する自己高揚呈示を対比的に用いることで、呈示形態の影響が明らかになると考えられる。

以上より、本研究では呈示形態と呈示意図が異なる自己呈示である自己卑下呈示と呈示形態と呈示意図が同じ自己呈示である自己高揚呈示を対比的に用い、呈示形態に関わらず呈示者の自己呈示の意図と受け手の反応との一致・不一致が呈示者に影響を与えることを場面想定法により検討する。

その際、呈示形態に関わらず、自己呈示の意図を「呈示内容に関する高評価を得ること」と設定し、より現実場面に近い自己呈示を検討する。また、意図と一致する反応として「呈示内容に関する高評価反応」、意図と一致しない反応として「呈示内容に関する低評価反応」を用いて、明白な一致反応と不一致反応が呈示者に及ぼす影響を検討する。さらに、自己呈示の内容を、能力と性格の2種に分けて検討する。このような検討によって、これまで明らかにされなかった自己呈示の呈示形態と呈示意図、自己呈示に対する反応が呈示者に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

仮説は、「呈示形態・呈示内容に関わらず、呈示意図と一致した反応を受け手から得たときのほうが、呈示意図と一致しない反応を受け手から得たときよりも呈示者の自己評価が高くなるだろう」となる。Table 1 に本研究で扱う自己呈示の特徴を示す。

Table 1 本研究で扱う自己呈示

	呈示内容：能力	呈示内容：性格
呈示形態（独立変数）	自己高揚／自己卑下	自己高揚／自己卑下
評価的反応（独立変数）	高評価／低評価	高評価／低評価
呈示意図（前提条件）	高評価	高評価

方 法

1. 実験計画と実験参加者

1-1. 実験計画

能力呈示場面と性格呈示場面の2つの場面において、それぞれ2（自己呈示形態：自己卑下呈示・自己高揚呈示）×2（受け手からの評価的反応：高評価反応・低評価反応）の2要因実験参加者間計画とする。

1-2. 実験参加者

実験参加者は大学生207名（男性69名、女性138名、平均年齢19.89歳、 $SD=1.71$ ）であった。そのうち能力呈示場面は104名（男性35名、女性69名、平均年齢19.88歳、 $SD=1.96$ ）であり、性格呈示場面は103名（男性34名、女性69名、平均年齢19.90歳、 $SD=1.45$ ）であった。もともとの実験参加者218名のうち、記入漏れがあった11名は分析から除外した。

2. 手続き

実験は場面想定法に基づく質問紙実験で行った。

能力（英語能力）について自己呈示する能力呈示場面と、性格について自己呈示する性格呈示場面を設け、それぞれ呈示形態と受け手からの評価的反応（以下反応とする）を操作した8種類のシナリオと質問紙をセットにした8種類の調査票を無作為に配布した。

能力呈示場面は「英語能力に関する試験であるTOEICを友人と一緒に受けた。その成績が返却されたときに友人から成績を尋ねられた。」という場面であった。性格呈示場面は「大学祭の際に所属するサークルで模擬店を出店した。同じサークルに所属する友人から模擬店の手伝いをどのくらい

手伝ったか尋ねられた。」という場面であった。

呈示形態に関しては、自己卑下呈示条件では自らの成績や性格を悪く伝え、自己高揚呈示条件では自らの成績や性格を良く伝えた。

反応に関しては、高評価反応条件では、受け手が呈示者の成績や性格が良いという反応を返し、低評価反応条件では、受け手は呈示者の成績や性格が悪いという反応を返した。

実験参加者には以上の8種類のシナリオのうちの1種類を含む調査票が配られた。また、調査は任意のものであり、質問紙への回答を拒否することができるということも実験参加者に伝えた上で、同意が得られた協力者に対してのみ調査を実施した。

3. 従属変数と測定尺度

3-1. 従属変数

従属変数は、①呈示内容に関する自己評価の変化、②全体的自己評価の変化、③感情の3種類であった。

3-2. 測定尺度

①呈示内容に関する自己評価の変化に関しては、他者反応受領後の自己評価尺度(吉田他, 2004)を一部改変したもの4項目、ローゼンバーグの自尊心尺度邦訳版(山本・松井・山成, 1982)を一部改変したもの10項目、自作の呈示内容に関する自己評価の変化を測定するものを1項目、計15項目を使用した。回答は「7非常に高くなった～1非常に低くなった」までの7段階評定で、数値が高くなるほど呈示内容に関する自己評価が高く変化したことを示す。呈示内容が場面によって異なるので、場面ごとに一部文言が異なる尺度である。以下、能力呈示場面においては能力関連評価の変化尺度、性格呈示場面においては性格関連評価の変化尺度とする。

②全体的自己評価の変化に関しては、ローゼンバーグの自尊心尺度邦訳版(山本他, 1982)を一部改変したもの10項目を使用した。回答は「7非常に高くなった～1非常に低くなった」までの7段階評定で、数値が高くなるほど呈示内容に関する自己評価が高く変化したことを示す。場面統合尺度であり、以下全体的評価尺度とする。

③感情に関しては、感情評定項目(沼崎・市川, 1997)を使用した。「対人不安」「有能感」「幸福」「安心」「緊張」の5因子から、各因子に因子負荷量が高いこと、2因子以上に高い負荷を示さないこと、意味が因子名から外れていないことを採用基準に各因子から2項目ずつ、計10項目を採用した。回答は、「1まったくそうでない」～「4非常にそうである」の4段階評定で、数値が高くなるほど示された感情が生起したことを示す。場面統合尺度であり、以下感情評定尺度とする。

4. 仮説

呈示形態に関わらず呈示者の意図と一致する反応である高評価反応を得たときのほうが低評価反応を得たときよりも、呈示者の呈示内容に関する自己評価と全体的自己評価は高くなるだろう。また、高評価反応を得たときのほうが低評価反応を得たときよりも、「有能感」・「幸福」・「安心」感情の生起は強くなり、「対人不安」「緊張」感情の生起は弱くなるだろう。

結 果

1. 分析

各尺度の構造を理解するために、因子分析を行い、その結果に基づいて、分析を行う。

1-1. 各従属変数の因子分析

能力関連評価尺度の 15 項目に対して主因子法による因子分析を行った。能力関連評価尺度は能力呈示場面においてのみ使用したため、能力呈示場面における実験参加者のデータを用いた。その結果、固有値の変化が 7.91, 1.83, 1.08...となり 1 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 1 因子構造を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。共通性が.20 未満の項目や因子負荷量が.40 未満の項目、計 3 項目（「項目 13：英語能力に関して、もっと自分自身を尊敬できるようになりたいという思い」、「項目 14：英語能力の面で自分はだめな人間だという思い」、「項目 15：英語能力の面で自分は役に立たない人間だという思い」）を除外し、12 項目に対して再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析結果を Table 2 に示す。1 因子の寄与率は 60.91%であった。また信頼性を確認したところ、 $\alpha=.95$ と十分に高い値を示した。以降能力関連自己評価においてはこの 12 項目の平均値に対して分析を行う。

性格関連評価尺度の 15 項目に対して主因子法による因子分析を行った。性格関連評価尺度は性格呈示場面においてのみ使用したため、性格呈示場面における実験参加者のデータを用いた。その結果、固有値の変化が 9.11, 1.69, 1.04...となり 1 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 1 因子構造を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。共通性が.20 未満の項目や因子負荷量や因子負荷量が.40 未満の項目、計 2 項目（「項目 8：性格に関して敗北者だという思い」「項目 13：性格に関して、もっと自分自身を尊敬できるようになりたいという思い」）を除外し、13 項目に対して再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析結果を Table 3 に示す。1 因子の寄与率は 66.87%であった。また信頼性を確認したところ、 $\alpha=.96$ と十分に高い値を示した。以降性格関連自己評価においてはこの 13 項目の平均値に対して分析を行う。

次に全体的評価尺度の 10 項目に対して主因子法による因子分析を行った。全体的評価尺度は能力呈示場面と性格呈示場面の両方において使用したため、全実験参加者のデータを用いた。その結果、固有値の変化が 6.38, 1.08, 0.82...となり 1 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 1 因子構造を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。共通性が.20 未満で、因子負荷量が.40 未満の 1 項目（「項目 8：もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」）を除外し、計 9 項目に対して再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析結果を Table 4 に示す。1 因子の寄与率は 66.97%であった。また信頼性を確認したところ、 $\alpha=.95$ と十分に高い値を示した。以降全体的自己評価においてはこの 9 項目の平均値に対して分析を行う。

最後に感情評定尺度の 10 項目に対して因子分析を行った。感情評定尺度は 5 因子から成る尺度であるため、まず、因子数を 5 因子に仮定した主因子法による因子分析を行った。しかし、解釈不能な因子が抽出された。そのため、再度主因子法による因子分析を行った。固有値の変化が 4.44, 2.18, 0.84...であったため 2 因子構造を採用した。次に 2 因子構造を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を実施した。その結果 2 因子の累積寄与率は 58.45%、因子間相関は $r=-.32$ となっ

Table 2 能力関連評価尺度の因子分析（主因子法）

項目	F1	共通性
3. 英語能力に関する自信	0.90	0.80
2. 英語能力がほかの人よりも劣っていないという思い	0.88	0.77
4. 英語能力がほかの人よりも優れているという思い	0.87	0.74
5. 英語能力が劣っておらず、人並みにはあるのだという思い	0.86	0.74
7. 英語能力の面で、よい素質を持っているという思い	0.83	0.67
11. 英語能力についての、自分に対する肯定感	0.79	0.63
1. 英語能力に関する自分自身の評価	0.79	0.61
6. 英語能力の面で、少なくとも人並みには価値のある人間であるという思い	0.79	0.62
9. 英語能力の面で、人並みにはうまくやれるちう思い	0.77	0.58
12. 英語能力についての、自分に対する肯定感	0.75	0.56
8. 英語能力に関して、敗北者だという思い	0.51	0.29
10. 英語能力に関して、自慢できるところがあまりないという思い	0.50	0.27
寄与率	61.91	

Table 3 性格関連評価尺度の因子分析（主因子法）

項目	F1	共通性
4. 性格が他の人よりもよいという思い	0.93	0.87
3. 性格に関する自身	0.91	0.82
7. 性格の面で、よい素質を持っているという思い	0.90	0.81
6. 性格の面で、少なくとも人並みには価値のある人間であるという思い	0.89	0.78
12. 性格についての、自分に対する満足感	0.88	0.78
9. 性格の面で、人並みにはよいという思い	0.88	0.76
11. 性格に着いての、自分に対する肯定感	0.88	0.76
1. 性格に関する自分自身の評価	0.84	0.70
2. 性格が他の人よりも悪くないという思い	0.83	0.69
5. 性格が悪くなく、人並みだという思い	0.80	0.63
15. 性格の面で、自分は役に立たない人間だという思い	0.64	0.42
14. 性格の面で、自分はだめな人間だという思い	0.62	0.40
10. 性格に関して、自慢できるところがあまりないという思い	0.50	0.27
寄与率	66.87	

Table 4 全体的評価尺度の因子分析（主因子法）

項目	F1	共通性
6. 自分に対する肯定感	0.91	0.86
1. 少なくとも人並みには価値があるという思い	0.87	0.82
7. 自分に対する満足感	0.83	0.68
5. 自分には自慢できるところがあまりないという思い	0.82	0.67
3. 敗北者だという思い	0.80	0.69
2. いろいろなよい素質を持っているという思い	0.80	0.8
4. 物事を人並みには、うまくやれるという思い	0.79	0.67
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だという思い	0.78	0.78
9. 自分はまったくだめな人間だという思い	0.75	0.81
寄与率	66.97	

Table 5 感情評定因子分析

項目	F1	F2	共通性
13. 快い	0.87	-0.01	0.57
12. 有能である	0.83	0.12	0.63
3. 楽しい	0.77	-0.02	0.61
17. 力量がある	0.72	0.15	0.47
9. リラックスしている	0.67	-0.14	0.53
4. 穏やかである	0.66	-0.19	0.55
10. 硬くなっている	0.09	0.94	0.84
5. 緊張している	0.14	0.80	0.60
6. ろうばいしている	-0.11	0.64	0.47
16. おろかな感じがする	-0.22	0.52	0.39
因子間相関: F1	-	-0.32	
累積寄与率	40.36	58.45	

た。項目の内容より第1因子を「肯定的感情」、第2因子を「否定的感情」と命名した。共通性が.20未満の項目、2因子以上に.40以上負荷していた項目、どの因子にも.40以上負荷しなかった項目は無かったため、項目の削除は行わなかった。各因子の信頼性を確認したところ「肯定的感情」は $\alpha = .89$ 、「否定的感情」は $\alpha = .82$ となり信頼性は十分に高かった。以降、「肯定的感情」6項目の平均値と「否定的感情」4項目の平均値を分析に用いる。因子分析結果をTable 5に示す。

1-2. 分散分析

2（呈示形態：自己卑下・自己高揚）×2（評価的反応：高評価・低評価）の分散分析を行った。以降、場面ごとに結果を記述する。

1-2-1. 能力呈示場面

能力呈示場面における各条件の平均値と標準偏差をTable 6、分散分析結果をTable 7に示す。以降、各従属変数の結果を記述する。

(1) 能力関連自己評価

能力関連自己評価において、反応の主効果が有意であった（ $F(1,100)=41.23, p<.001$ ）。高評価反応を得た場合（ $M=4.29$ ）の方が低評価反応を得た場合（ $M=3.20$ ）より能力関連自己評価が高くなった。

(2) 全体的自己評価

全体的自己評価においても反応の主効果が有意であった（ $F(1,100)=6.88, p<.05$ ）。高評価反応を得た場合（ $M=4.10$ ）の方が低評価反応を得た場合（ $M=3.66$ ）より全体的自己評価が高くなっていた。

(3) 肯定的感情

肯定的感情において、反応の主効果が有意であった（ $F(1,100)=21.25, p<.001$ ）。高評価反応を得た場合（ $M=1.52$ ）の方が低評価反応を得た場合（ $M=1.12$ ）より肯定的な感情が強く生起していた。

(4) 否定的感情

否定的感情においてはいずれの主効果または交互作用も有意ではなかった。否定的感情の生起においては各条件において差は無かった。

Table 6 能力呈示場面における各条件の平均 (標準偏差)

形態 反応	<i>n</i>	自己卑下呈示		自己高揚呈示	
		高評価	低評価	高評価	低評価
		24	25	27	28
能力関連自己評価の変化	<i>M(SD)</i>	4.34(0.75)	3.41(0.89)	4.24(0.91)	3.21(0.52)
全体的自己評価の変化	<i>M(SD)</i>	4.17(0.89)	3.57(0.73)	4.04(1.11)	3.74(0.67)
肯定的感情	<i>M(SD)</i>	1.60(0.53)	1.09(0.19)	1.45(0.62)	1.14(0.31)
否定的感情	<i>M(SD)</i>	1.80(0.75)	1.77(0.65)	1.99(0.63)	1.92(0.59)

Table 7 能力呈示場面の分散分析結果: *F*値 (*df*=1/100)

	形態の主効果	反応の主効果	交互作用	単純主効果
能力に関する自己評価の変化	<i>F</i> =0.99 <i>ns</i>	<i>F</i> =41.23*** 高評価>低評価	<i>F</i> =0.10 <i>ns</i>	
全体的自己評価の変化	<i>F</i> =0.01 <i>ns</i>	<i>F</i> =6.88* 高評価>低評価	<i>F</i> =0.76 <i>ns</i>	
肯定的感情	<i>F</i> =0.35 <i>ns</i>	<i>F</i> =21.25*** 高評価>低評価	<i>F</i> =1.34 <i>ns</i>	
否定的感情	<i>F</i> =1.75 <i>ns</i>	<i>F</i> =0.16 <i>ns</i>	<i>F</i> =0.02 <i>ns</i>	

****p*<.001 ***p*<.01 **p*<.05 †*p*<.10

Table 8 性格呈示場面における各条件の平均 (標準偏差)

形態 反応	<i>n</i>	自己卑下呈示		自己高揚呈示	
		高評価	低評価	高評価	低評価
		26	24	28	25
性格関連自己評価の変化	<i>M(SD)</i>	4.22(0.99)	3.48(1.09)	3.29(0.99)	2.99(1.00)
全体的自己評価の変化	<i>M(SD)</i>	4.27(1.05)	3.55(1.10)	3.52(0.95)	3.25(0.96)
肯定的感情	<i>M(SD)</i>	1.78(0.71)	1.17(0.34)	1.45(0.64)	1.05(0.10)
否定的感情	<i>M(SD)</i>	1.34(0.44)	2.05(0.70)	2.06(0.77)	2.34(0.83)

Table 9 性格呈示場面の分散分析結果: *F*値 (*df*=1/99)

	形態の主効果	反応の主効果	交互作用	単純主効果
性格に関する自己評価の変化	<i>F</i> =12.51*** 高揚<卑下	<i>F</i> =6.78* 高評価>低評価	<i>F</i> =1.25 <i>ns</i>	
全体的自己評価の変化	<i>F</i> =6.99** 高揚<卑下	<i>F</i> =6.09* 高評価>低評価	<i>F</i> =0.24 <i>ns</i>	
肯定的感情	<i>F</i> =4.99* 高揚<卑下	<i>F</i> =24.02*** 高評価>低評価	<i>F</i> =1.11 <i>ns</i>	
否定的感情	<i>F</i> =13.35*** 高揚>卑下	<i>F</i> =12.80*** 高評価<低評価	<i>F</i> =0.12 <i>ns</i>	

****p*<.001 ***p*<.01 **p*<.05 †*p*<.10

1-2-2. 性格呈示場面

性格呈示場面における各条件の平均値と標準偏差を Table 8, 分散分析結果を Table 9 に示す。以降, 各従属変数の結果を記述する。

(1) 性格関連自己評価

性格関連自己評価において, 反応の主効果 ($F(1,99)=6.78, p<.05$) と呈示形態の主効果 ($F(1,99)=12.51, p<.001$) が有意であった。反応の主効果では, 高評価反応を得た場合 ($M=3.74$) の方が低評価反応を得た場合 ($M=3.23$) より性格関連自己評価が高くなっていた。また, 呈示形態の主効果では, 自己卑下呈示を行った場合 ($M=3.86$) の方が自己高揚呈示を行った場合 ($M=3.15$) より高くなっていた。

(2) 全体的自己評価

全体的自己評価において, 反応の主効果 ($F(1,99)=6.09, p<.05$) と呈示形態の主効果 ($F(1,99)=6.99, p<.05$) が有意であった。反応の主効果では, 高評価反応を得た場合 ($M=3.88$) の方が低評価反応を得た場合 ($M=3.39$) より全体的自己評価が高くなっていた。また, 呈示形態の主効果では, 自己卑下呈示を行った場合 ($M=3.93$) の方が自己高揚呈示を行った場合 ($M=3.39$) より高くなっていた。

(3) 感情: 肯定的感情

肯定的感情において, 反応の主効果 ($F(1,99)=24.02, p<.001$) と呈示形態の主効果 ($F(1,99)=4.99, p<.05$) が有意であった。反応の主効果では, 高評価反応を得た場合 ($M=1.61$) の方が, 低評価反応を得た場合 ($M=1.11$) より肯定的な感情が強く生起していた。また, 呈示形態の主効果では, 自己卑下呈示を行った場合 ($M=1.49$) の方自己高揚呈示を行った場合 ($M=1.26$) より肯定的な感情が強く生起していた。

(4) 感情: 否定的感情

否定的感情においても, 反応の主効果 ($F(1,99)=12.80, p<.001$) と呈示形態の主効果 ($F(1,99)=13.35, p<.001$) が有意であった。反応の主効果では, 高評価反応を得た場合 ($M=1.71$) の方が, 低評価反応を得た場合 ($M=2.19$) より否定的な感情が弱く生起していた。また, 呈示形態の主効果では, 自己卑下呈示を行った場合 ($M=1.68$) の方が自己高揚呈示を行った場合 ($M=2.19$) より否定的な感情の生起は弱かった。

考 察

場面ごとに特徴的な結果が現れていたため, 以下場面ごとに考察し, その後に総合考察を行う。

1. 能力呈示場面

1-1. 反応の主効果

能力関連評価と全体的評価, 肯定的感情において反応の主効果が有意であった。能力関連評価と全体的評価, 肯定的感情において, 高評価反応が得られたときのほうが, 低評価反応が得られた場合よりも, 得点が高くなっていた。これらの結果は仮説を支持する結果であり, 意図と一致する反応を得たときのほうが不一致を得たときよりも呈示者の自己評価は高くなることが明らかになった。

また, 高評価反応を得た場合の平均値は midpoint の「変わらない」に近く, 低評価反応を得た場合の

平均値は中点よりも低くなっていることより、自己評価は、高評価反応を得られて高くなったと考えるよりも、低評価反応を得て低くなったと見たほうが妥当であろう。肯定的感情に関しても同様のことが言え、相対的に見たときに高評価反応を得た場合の肯定的感情は低評価反応を得た場合よりも高くなっているが、それぞれの平均値は低く、高評価反応を得たからと言って肯定的感情が強く生起しているわけではないと考えられる。

2. 性格呈示場面

2-1. 反応の主効果

性格関連評価と全体的評価、肯定的感情、否定的感情（すべての従属変数）において呈示形態の主効果と反応の主効果が有意であった。反応の主効果は能力呈示場面と同じく、性格関連評価と全体的評価、肯定的感情において、高評価反応を得たときのほうが低評価反応を得たときよりも得点が高くなっていた。また、否定的感情においては高評価反応を得たときのほうが低評価反応を得たとき得点が低くなっていた。これらの結果は能力呈示場面と同様に仮説を支持する結果である。

また、能力呈示場面と同様に、高評価反応を得た場合の平均値は中点「変わらない」に近く、低評価反応を得た場合の平均値が中点よりも低くなっている。そのため自己評価は、高評価反応を得られて高くなったのではなく、低評価反応を得て低くなったと考えられる。

2-2. 呈示形態の主効果

性格呈示場面においては呈示形態の主効果が有意となっており、性格関連評価と全体的評価、肯定的感情において、自己卑下呈示を行ったときのほうが自己高揚呈示を行ったときよりも得点が高くなった。また、否定的感情においては自己卑下呈示を行ったときのほうが自己高揚呈示を行ったときよりも得点が低くなった。この呈示形態の主効果に関しては予想をしていなかった結果であるが、いくつかの理由が推測できる。

理由の1つとして、実験参加者が自分のこととしてシナリオを読まなかったという可能性がある。性格呈示場面のシナリオが不自然であり、シナリオの中の「あなた」を他者として捉えてしまった。そのため自己高揚呈示を行っている者よりも自己卑下呈示を行っているものに好印象を抱き、評価が上がったという可能性が考えられる。また、2つめとして特に性格を呈示する場合に、自己高揚呈示よりも自己卑下呈示を行うほうが自然であるということが考えられる。シナリオを自分のこととして読みはしたが、性格について自己高揚呈示を行うということが自己卑下呈示よりも不自然であったため、その不自然さゆえに、自己評価が自己高揚呈示群において自己卑下呈示群よりも下がったと推測することもできるのではないだろうか。最後に、本実験の性格呈示群において自己卑下呈示を行うことが望ましいという規範を強く持っている参加者が多くいたという可能性が考えられる。吉田・浦（2003）によると、自己卑下呈示規範の内化傾向が強い者は、自己卑下呈示を行うこと自体が精神的健康につながるということを明らかにしている。本研究の性格呈示群の参加者も自己卑下呈示規範の内化が強かったため、自己高揚呈示群よりも自己卑下呈示群のほうが自己評価や感情がポジティブに変化した可能性が考えられる。

本研究では自己卑下呈示規範の内化の程度を測定やシナリオの自然さのチェック、操作チェックなどを行っていない。そのため能力呈示場面と性格呈示場面で異なる結果が出たことしかわから

ない。なぜ場面によってこのような違いが生まれたのか、検討の余地が残されている。

3. 総合考察

3-1. 反応の主効果

仮説通り、能力呈示場面・性格呈示場面ともに呈示形態にかかわらず、呈示意図と一致した反応が受け手から得られた場合のほうが、呈示意図との不一致反応を得られた場合よりも、呈示者の自己評価はポジティブに変化した。これは仮説だけでなく、吉田他（2004）の調査研究を支持した結果であり、Upshaw & Yates（1968）の結果とは相反する結果であった。受け手の反応が呈示者に及ぼす影響においては、呈示形態でなく呈示意図との一致・不一致が重要であるということが明らかになった。これは、意図的な行動である自己呈示行動に特徴的な結果であり、自己呈示が呈示者に影響を及ぼす直接的対人過程のみでなく、自己呈示に関する研究においては、何のために自己呈示するのかという自己呈示の意図が重要な視点になると示唆しているのではないだろうか。実験的に呈示意図を操作することは大変困難であるが、場面想定法を用いることや、現実場面に沿った呈示意図を教示することなどの工夫を行うことで、現実場面に近い結果を得ることが可能になるだろう。

また、平均値からは、呈示意図との一致反応（高評価反応）は呈示者の自己評価をポジティブには変化させず、呈示意図との不一致反応（低評価反応）が自己評価をネガティブに変化させていたために、相対的には一致反応のほうが不一致反応よりも呈示者の自己評価をポジティブに変化させているということがわかる。自己卑下呈示に対する反応を調査した吉田他（2004）によると、自己卑下呈示に対する意図との不一致反応は10%以下しか見られないが、一致反応は60%近く見られることが明らかになっている。吉田他（2004）の調査は自己卑下呈示に関する調査のみであるが、この結果はこのように、自己呈示に対する呈示意図との一致反応が多くみられ、自己呈示に対する一致反応は当然返される反応であるため、一致反応を得ても大きな影響は受けず、逆に不一致反応を得ることが少ないために、不一致反応を得たときにネガティブな影響を強く受けたのではないだろうかと推論できる。

3-2. 呈示形態の主効果

また、場面によって呈示形態の主効果の有無に差があった。能力呈示場面では呈示形態が呈示者の自己評価に影響を与えることはなかったが、性格呈示場面では呈示形態が呈示者の自己評価や感情に影響を与えた。自己卑下呈示群のほうが自己高揚呈示群よりも自己評価がポジティブに変化していた。なぜ能力呈示場面と性格呈示場面で呈示形態の効果に差が生まれたのか、なぜ自己卑下呈示群のほうが自己高揚呈示群よりもポジティブに変化したのかは検討できなかった。この結果にはシナリオ想起の容易さや、日本文化における自己卑下呈示規範（自己卑下呈示を望ましい自己呈示であるとする規範）が関連していると推測できる。また、これまで性格についての自己高揚・自己卑下呈示に関する検討はほとんど行われていないため、性格に関する自己高揚呈示・自己卑下呈示の特徴を明らかにする必要があると考えられる。

3-3. まとめと今後の課題

本研究では、自己高揚呈示と自己卑下呈示に対する受け手の反応が呈示者に与える影響を、呈示内容別に検討した。特に自己呈示が呈示者に及ぼす影響の直接的対人過程においては、呈示意図と

反応の一致・不一致が重要であることが明らかになった。このように反応要因の影響の基礎的な資料を提供できたのではないだろうか。自己呈示はその行動と意図が異なるということがある点特徴的で興味深い行動である。今後は実験方法の問題はあるが、呈示意図を操作することで、さらに自己呈示行動の特色が明らかになるのではないだろうか。まだまだ、自己呈示と反応が呈示者に与える影響に関する研究数は少なく、今後の検討が期待される。

引用文献

- 足立にれか (1998). 自己呈示が自己評価に及ぼす影響—自己呈示場面における匿名性と相手からの反応— 性格心理学研究, **7**, 54-56.
- 安藤清志 (1994). セレクション社会心理学 1 見せる自分/見せない自分 自己呈示の社会心理学 サイエンス社
- Dymkowski, M., & Cisek, S. (1998). The impact of self-presentation effectiveness on subsequent self-beliefs. *Polish Psychological Bulletin*, **29**, 181-197.
- Gegen, K. J. (1965). The effect of integration goals and personalistic feedback on the presentation of self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 413-424.
- Jones, E. E., Rhodewalt, F., Berglas, S., & Skelton, J. A. (1981). Effects of strategic self-presentation on subsequent self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **41**, 407-421.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, **107**, 34-47.
- 沼崎 誠・市川 操 (1997). 主張的セルフ・ハンディキャッピングが主張者に及ぼす効果—能力関連感情と対人関連感情— 帝京大学文学部紀要 (心理学), **4**, 75-89.
- Rhodewalt, F. (1998). Self-presentation and the phenomenal self: The “carryover-effect” revisited. In J. M. Darley & J. Cooper (Eds.), *Attribution and social interaction: The legacy of Edward E. Jones*. Washington DC: American Psychological Association. pp.375-398.
- Rhodewalt, F., & Agustsdottir, S. (1986). Effects of self-presentation on the phenomenal self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 47-55.
- Schlenker, B. R. (1980). *Impression management: The self concept, social identity, and interpersonal relations*. Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Schlenker, B. R., Dlugolecki, D. W. & Doherty, K. (1994). The impact of self-presentations on self-appraisals and behavior: The power of public commitment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 20-33.
- Tedeschi, J. T., & Norman, N. (1985). Social power, self-presentation, and the self. In B. R. Schlenker (Ed.), *The self and social life*. New York: McGraw-Hill.
- Upshaw, H. S., & Yates, L. A. (1968). Self-persuasion, social approval, and task success as determinants of self-esteem following impression management. *Journal of Experimental Social Psychology*, **4**, 143-152.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**,

64-68.

吉田綾乃・浦 光博 (2003). 自己卑下呈示を通じた直接的・間接的な適応促進効果の検討 実験
社会心理学研究, **42**, 120-130.

吉田綾乃・浦 光博・黒川正流 (2004). 日本人の自己卑下呈示に関する研究：他者反応に注目し
て 社会心理学研究, **20**, 144-151.